

vol. 15

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



千葉市美術館開館五周年記念

菱川師宣展

10月24日(火)～11月26日(日)

開館五周年を迎えて



菱川師宣『隅田川・上野図屏風』左隻 千葉市美術館蔵

人間に誕生日があるように、美術館にも開館記念日があります。本館にとっては、平成7年（1995）11月3日、文化の日に、「喜多川歌麿展」を一般公開した初日が、その日に当たりますので、今年は開館五周年、人間でいえば満5歳の美術館になるわけです。

5歳といえばまだ幼稚園の園児という年頃で、小学校の年齢にも達しないわけですから、多少のよちよち歩きも許されようかと甘えた気持ちになる時もありますが、むしろ、良い子、強い子、たくましい子、そして人気のある子に早く育つようにという、厳しい周囲の視線をひしひしと感じている昨今です。

東京の近隣にある都市型の美術館として、どこにもあるような無個性の存在にはなりたくない、開館以来歯をくいしばって挑戦をし続けてきたようなところがありました。今まで行ってきた特別展のカタログを一覧すればそのことがよく分かるのです。二代目の館長として引き継ぎを受けてからまだ一年半ほどですので、初めの頃のことは推し測っての考えになりますが、試みに総括しますと、当館のささやかな歴史は、以下に述べるような志に沿って収集し、展示する活動を行ってきたように思われます。

まず一つは、地域に根ざしてその美の伝統を探り、確めることです。千葉市、あるいは房総の地の美や文化のルーツは、どのようであったのか、そのことを造形という行為の所産によってたずねることにこだわってきました。

二つ目には、比較的近い時代、桃山以降昭和戦前期に至る日本の、美と文化の歴史を、やはり美術という具体的な表現に即して

理解し、鑑賞することに、心がけてきました。

そして三番目には、第二次大戦を経験して以降の直近の時代^{ちよっせん}、いわゆる現代の、日本と世界の芸術運動に対して、目をそらすことなく真摯に向き合い、その純粋な形での紹介に努めてきました。

人が、一個の自分から始まって、家族、地域、国、世界と空間的に意識を広げていき、今から近い自分の過去や遠い歴史を振り返りつつ未来をも見つめようと努めるのと同じように、私たちも美術館を一つの生命体として自覚し、小さくてしかも広大なひろがりを抱えた存在であり続けようと、覚悟を新たにしているところです。五周年を直前にして所感の一端を吐露させて頂き、今後とも更なるご支援とご叱正をお寄せ下さいますようお願いする次第です。

さて、先頃、大英博物館から友好の証としての贈り物が当館に届けられました。十八世紀に制作された覗き機関^{からくり}の器械が一基と、同じく十八世紀にロンドンで出版された眼鏡絵という版画が7枚という、今では得がたい貴重な品物でした。

これらは実は、単なる気まぐれなプレゼントというわけのものではなく、大英博物館と当館、ひいてはロンドンと千葉、さらには英国と日本との友情の懸け橋となる、有難い贈り物であったのです。

話は冒頭の開館展にさかのぼることになります。この「喜多川歌麿展」は、大英博物館の日本部と本館とが共同で企画し、実施したものでありましたが、ロンドンでの展観はその年（1995年）の英国国内での美術展の内から第二位に相当するものとの高い評



菱川師宣「隅田川・上野園屏風」右隻 千葉市美術館蔵

価を受け、「英国ナショナル・アート・コレクションズ」基金から銀賞を授与されることとなりました。その賞金が総額で五千ポンドということであったそうですが、さすがに紳士の国として定評のある英国の国立博物館は度量が大きいというか、信義に厚いというのか、独り占めにする事なく、その半額を共同企画者である千葉市美術館に譲り贈って、喜びを共にしようと提案してくれたのでした。

そういう友情の形見としてのお金ですから、格別に記念の品となるものをと長らく思案し、大英博物館とも相談して、ついに眼鏡絵はどうかということになったのでした。

なぜ眼鏡絵が日英両国、あるいは東西の美術館にとって友情の記念品になるにふさわしいかということには、若干の説明が必要かも知れません。



眼鏡絵とは、英語でパースペクティブという愛称もあるように科学的(合理的)な遠近画法による風景画を内容とし、それを凸レンズを通して見ることで空間の錯視効果をいっそう強調して楽しもうとする遊びに使われたものでした。レンズを使うので眼鏡絵というわけです。

十七世紀に始まったこのおもちゃ絵は、パリやロンドンを中心に十九世紀の初め頃までヨーロッパ中に流行したばかりか、ベルシャや中国を経由して日本にも伝わってきました。すでに十八世紀の前半に江戸の浮世絵師はその真似をし始めていまして、やが

て北斎や広重の、洋風の遠近法を取り入れた風景画に洗練されて行きます。その浮世絵風景画が、さらにまた、モネやゴッホ、そしてロンドンの風景を描いたホイッスラーにも深刻な影響を与えることになるわけです。眼鏡絵から浮世絵、浮世絵から印象派など近代西洋の絵画へと、キャッチボールのような洋の東西を懸け渡す美術の交流があったことが、今回の贈り物を通じて実感されるのです。

暗いニュースが多い近頃では特別に明るい話題として、千葉の地元はもとより日本の全国各地に報道されたことは、大英博物館から寄せられた好意に多少とも報いられたかと、関係者の一人として心から嬉しく思われたものでした。

10月24日から約1ヶ月間開催される千葉市美術館五周年記念の特別展は、千葉県が生んだ美の偉人、菱川師宣の全画業を回顧し、顕彰しようとするものです。師宣は、浮世絵の創始者として国際的にその名が知られている画家ですが、その代表作で、よく知られた肉筆画作品「見返り美人図」(東京国立博物館蔵)には、画家みづから「房陽菱川友竹筆」と署名しています。「房陽」とは晩年の師宣が安房国の出身であるとして故郷を誇る冠称だったのでした。

我田引水をお許し頂くならば、千葉市美術館も師宣にならって、千葉にあることを十分に自覚し、誇りとしながら、今と昔、そして世界を広く見据えた活動を今後とも継続して行きたいものと、決意を新たにします。

千葉市美術館館長 小林 忠

「菱川師宣」展について



菱川師宣「見返り美人図」東京国立博物館蔵

菱川師宣（～1694）は、安房国保田（現千葉県鋸南町・1985年に生誕の地に菱川師宣記念館がオープン）の出身で、江戸において風俗画に新様を樹立し、浮世絵派の祖と仰がれている絵師である。

師宣は在世当時から高い評価を得、人気絵師であったことから、今日、師宣落款の作品や師宣に比定されている作品は、相当数伝来している。しかし、師宣工房の実態や、長年にわたって生産され続けてきた類似作・偽作の類が十分に解明されていないため、その全容を捉えることは、なかなか困難であるのが現状である。

菱川師宣展は戦後、1976年の千葉そごうと1994年のサントリー美術館の2回行われ、それぞれ大きな成果を収めたが、欧米にある重要作品が展示されず、版画組物が少ないなど、いくつかの課題を残すものであった。

千葉市美術館は、開館記念の「喜多川歌麿展」以来、千葉県に立地する美術館として、浮世絵派の作品の収集とその展示に力を注いできた。そこで、開館5周年を迎えるにあたり、その出発点に位置づけられる菱川師宣の全容を提示し、その魅力を紹介する特別展を開催しようというものである。

展示予定作品は、152点である。そのうち肉筆画は27点。屏風4点、画卷13点、画帖1点、掛幅9点という内訳である。屏風

では、現存する師宣の屏風で最も早い様式を備えている「上野隅田川図屏風」（千葉市美術館）と、最晩年の「歌舞伎図屏風」（東京国立博物館、本年師宣画としては初めて重要文化財に指定された）を比較して鑑賞できるところが注目される。

画卷・掛幅では、「北楼及び演劇図巻」（東京国立博物館）と、それと同様の年記が入った作品、「遊里風俗図巻」（出光美術館）、「芝居茶屋遊楽図巻」（大英博物館）、「角田川図」（千葉市美術館）、「隅田川遊楽図」（大英博物館）がすべて一堂に会するという点が興味深い。これを機に「北楼及び演劇図巻」に関するシンポジウムも予定されている。この他、三種の「江戸風俗図巻」（ボストン美術館）も出品されるなど、画卷の充実度は抜群である。

版画は72点。「よしはらの躰」「上野花見の躰」「曾我物語図」「大名行列」「酒呑童子」の組物がずらりと並ぶ。かなりの図柄について複数の遺品が展示されるので、比較する楽しみも味わえる。枕絵組物（いわゆる美人画）は、二種の組物が展示されないが、それでも13点ある。

絵入版本は53点。主要な絵本はすべて出品される。師宣の絵本類の版本は、天和2年（1682）の暮れの江戸の大火でかなりのものが消失したのではないかと、という説が佐藤悟氏によって提唱されたが、それを裏づけるように、その火災の前と後の年記を持つ同一版本は、版木が異なるという調査結果となった。その成果が展示に反映されるので期待していただきたい。

本館学芸係長 浅野秀剛



会場にて

この文章を綴っているのは、「土門拳—日本の彫刻」展が始まってはじめての日曜日です。初日から数日間は雨にたたられましたが、昨日・今日とさいわい天気もあまり崩れず、来場されるお客様の出足も好調のようです。数人のグループで、写真の前であれこれお話ししておられる姿をよく見かけます。反応もどうやらわるくないようで、ありがたいことです。

※

昨年当館で開催した「房総の神と仏」は、房総という土地に遺る仏教及び神道の宗教芸術を紹介するものでした。今回の展覧会は仏像を主体とするわが国の古典彫刻の魅力を紹介することが、ねらいのひとつとしてあります。展覧会の趣旨はいささか異なりますが、佛教を中心とした彫刻の点から見れば、地域限定の前者に対し、後者は規模を全国に広げたということがいえます。

ただ今、首都圏の他の美術館では世界の四大文明展が開催されています。戦後の日本では、ミロのヴィーナスをはじめ、ツタンカーメンやモナ・リザなど、あまたの名作が来日し、愛好家の目を楽しませてきました。

しかし今回、さまざまな媒体で繰り返し強調したように、飛鳥から鎌倉・南北朝時代あたりまでの、わが国の優れた彫刻が一堂に会した例は、これまでありませんでした。たとえば、東京国立博物館では平常陳列でその一端を紹介しています。けれども、全体像を通覧できるほどではありません。同館の普及課に問い合わせたところ、特定の時代に限定した彫刻展は開催したことはあるが通史としての例は無い、ということでした（場所がら、京都や奈良の国立博物館では戦前開催されたことがあったかもしれません）。

これは、わが国における古い時代の彫刻のほとんどが仏像や神像という、信仰上欠かせない存在であることが大きな理由となっています。加えて現在では、それらを目当てに各寺社を訪れる観光客が多いわけですから、展覧会開催のために全国の各寺社に対して一斉に拝借をお願いすることは難しい。

このことを考えると、「房総の神と仏」における県内の神社・仏閣をはじめとする関係者の皆様方のご理解とご協力に、改めて感謝せずにはおられません。

※

わが国の彫刻の歩み、というテーマが大それたものであるなら、過去から現在までの日本彫刻に共通している魅力に焦点を絞って紹介する、ということではどうでしょう。

これも重要なテーマとなります。

明治期の高村光太郎や荻原守衛いらい、わが国の彫刻家たちは古典から多くのことを学んで来ました。現在においても同様です。学生たちは大学の研修旅行や個人で各寺社をめぐり、彫刻という芸術の本質について先人たちの作品から学ぼうとしています。

ですから、現代の彫刻だけによる展覧会では理解しにくいと思われる表現でも、古典と併せて見ることによって、実は彫刻特有の抽象性や空間把握などに共通点があることをご理解いただけるのではないかと、そう私は考えています（当館の所蔵作品にも柳原義達氏の作品をはじめ、戦後作のいい彫刻がありますから、今回の展覧会に併せて展示しても良かったですね）。

そのような展覧会ならば、過去に例があります。

1956年、東京の国立近代美術館で「日本の彫刻—上代と現代—」という展覧会が開かれました。これは上代のはにわ、金銅仏、伎楽面と、当時の中堅作家の作品を取り混ぜて展示されていました。残念ながらこの展覧会を私は見ていませんが、これがわが国で今日にいたるまで、古典と現代彫刻が一緒に展示された数少ない、しかも最も大規模なものです。

展覧会の挨拶文の一節を引用してみます。

…埴輪の示す単純な形体感や 金銅佛のみせる流れる力の美しさ 伎楽面のもつ高度なおもむき これらの性格は現代においても要求せられるものであり また具象、非具象をとわず現代作品の造形 内的生命の象徴としての彫刻に ひとしくみとめられるものである この意味において上代の作品を美術史的に理解することも大切であるが この展覧会における様にそれを現代とのつながりにおいてのものものとしてみることもまた望ましいのである (原文のまま)

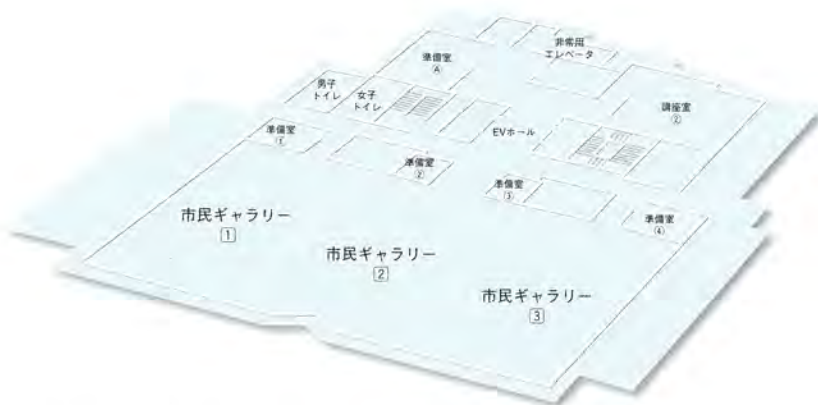
やはり、展覧会屋が考えることは同じ、といったところでしょうか。

「土門拳—日本の彫刻」展の会場を歩きながら、わが国の彫刻の歩みとその魅力について、今後どのような展覧会のかたちで紹介して行くか、大きな宿題として感じています。

本館学芸員 薬科英也

市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。



展示室	床面積	壁面延長	壁面高
市民ギャラリー①	162.0m ²	49.0m	3.0m
市民ギャラリー②	136.7m ²	37.6m	3.0m
市民ギャラリー③	162.0m ²	49.0m	3.0m

市民ギャラリーは①・②・③の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。

また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

【利用時間】 10:00～18:00（金曜日のみ20:00まで）

【休館日】 月曜日及び年末年始

※ご利用の際の手続きなど、詳しくは美術館までお問い合わせください。

「友の会」入会のご案内

千葉市美術館は開館以来、より身近な美術館づくりを目指しております。

千葉市美術館「友の会」は、美術を愛する人々にさらに親しまれる美術館づくりを進めるために誕生しました。

皆様のご入会をお待ちしております。

【会員の特典は】

■無料サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展が無料で何回も観覧できます。

■割引サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する展覧会図録が割引（販売価格の10%引き）で購入できます。

千葉市および助千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展の観覧料が同伴者も割引（3名まで団体料金）になります。

■情報サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する講演会等の美術館情報をお届けします。

【会員の資格は】

- 会員期間は、入会日から1年間です（美術館パスポートの発行を持って、会費納入の領収書とさせていただきます。）
- 学生会員の方は、学生証をご提示（コピーも可）ください。
- 途中で退会されても、会費の払い戻しはいたしません。

- パスポート紛失等により再発行を受ける場合は、手数料が必要となります。

【会費の額は】

■入会金

- 一般会員 1,000円
- 学生会員（高・専・大） 500円
- ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族） 2,000円

■年会費

- 一般会員 年3,000円
- 学生会員（高・専・大） 年1,500円
- ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族） 年6,000円

【入会の申込み方法は】

- 美術館8階の入館者受付に備えてある「入会申込書」を利用し、お申込みください。
- 休館日（臨時含む）や年末年始は、お申込みできません。
- 詳細は、千葉市美術館 TEL: 043-221-2311までお問い合わせください。

展覧会スケジュール

【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中

【開館時間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）

【ハローダイヤル】043-227-8600

※展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。



菱川師宣「曾我物語」個人蔵

◆千葉市美術館 開館五周年記念 「菱川師宣展」10月24日(火) - 11月26日(日)

菱川師宣（～1694）は、安房国保田（現・千葉県鋸南町）の出身で、江戸において風俗画のジャンルに新風を吹き込み、浮世絵派の祖と仰がれている絵師です。

菱川師宣の展覧会は戦後2回行われ、それぞれ大きな成果を収めました。欧米にある重要作品が展示されず、版画の組物や版本の出品が少ないなど、いくつかの課題を残すものだったといえます。

千葉市美術館は「喜多川歌麿展」で開館し、このたび開館五周年を迎えます。本展は、浮世絵の出発点に位置付けられる菱川師宣の全容とその魅力を紹介する特別展です。

◆「浮世絵 — 美の極致」 初公開 スイス・バウアーコレクション 2001年1月4日(木) - 2月4日(日)

スイスの歴史的な都市、ジュネーヴ。この土地にあるバウアーコレクションは、浮世絵をはじめ中国・日本の陶磁器や根付の収集で知られた、ヨーロッパでも屈指の東洋美術の一大コレクションです。

本展は、図版が紹介されているだけでも600点以上を数える膨大な浮世絵の収集品から特に優れた作品を選び、展示しようとするものです。初期から幕末・明治までの浮世絵の歴史を紹介しますが、なかでも歌麿・写楽とその周辺絵師たちの時代は圧巻です。



長谷川潔「Magic」千葉市美術館蔵

◆千葉市美術館所蔵作品展 「詩画集」 10月24日(火) - 12月21日(木)



喜多川歌麿「当世踊子揃 三番目」バウアーコレクション



トーマス・ルフ「室内」1982年

誰にでも撮れるのだから誰が撮ったかによって大分違うことになってしまうのが写真というメディア。不思議な技法だ。カメラを構え、焦点を合わせる、シャッターを押す、という手続きに上手下手はあっても、それら一連の動作は本気になればすぐに習得できる問題だし、フルオートマチックで高画質の写真機、フィルムを使うことが許されるなら、その結果に大きな差異が見られよう筈はない。それなのに何故、写真を使う芸術家が存在しうるのか。

この作品を見て欲しい。ドイツ人の生活する家庭の室内を撮影したシリーズの1点。なんとという静穏な情景だろう。ありきたりの光景ではあるが、そこには私たちの心に作用し、静穏さを感じさせる要素が含まれている。作者トーマス・ルフは1958年生まれ。デュッセルドルフ美術アカデミー（ドイツ）でベッヒャーというやはり

写真を使う高名な芸術家に学んでいる。不特定の人物の表情を正面から捉えた「ポートレート」も彼の有名なシリーズだ。決して演出せず、私たちに何事も押しつけず、自分の視線と鑑賞者の視線が、その情景に何らかの感情を共有するよう、その場をしつらえる。間違いの起こりやすい困難な仕事だ。私たちの心が求めるイメージとは、日常的世界の中に存在し、発見されることを待っている。それに気づく繊細さを持ち合わせているのがアーティストである。写真を素材とした芸術とは、決して安易でも容易でもない。むしろ簡単に誤算を起し、しかもそのことに気付きにくいやっかいなメディアである。

本館学芸員 半田滋男

美術館のご利用あない

◆ NTTハローダイヤル 043-227-8600

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになります。

7階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

【開室時間】10:00～18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

【営業時間】11:00～21:00

- JR総武線千葉駅
- 東口より徒歩約15分
- 京成バス大学病院行または南矢作行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩約2分
- 千葉都市モノレール県庁前行「葦川公園」下車徒歩約5分
- 無料巡回シャトルバス「チーバス」（のりば⑨）「中央区役所・美術館前」下車（11:05～18:35の毎時05分と35分に出発・水曜運休）
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

